

Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

ダイヤの花

戦いは激戦を極めた。無限に広がる砂とそこかしこに出現している岩の大地が入り混じった特殊な環境の中、ダイヤモンドを取り込んだグスタフと虎眼達5人が自分の持っている全ての力をぶつけあっている。

虎眼、猫眼、そしてアゲートの3人、合わせて5つの拳と4つの脚が同時にグスタフに襲いかかるが、あろうことか全ての攻撃をグスタフ一人だけ、たった二つの手の平で受け止め、受け流されてしまっている。素人では攻撃のモーションを見ることもできないほど複雑にして高速の連撃なのだが、それをすべて視認できているグスタフの視力と反射神経が異常なのだ。唯一の救いとは言えば、3人の攻撃を受け止めるのが今のグスタフの限界らしく攻撃の手を加えることができないという一点しかない。

しかしその一点のみが5人にとって最大の勝機、この連撃の間にグスタフを倒すための準備を着々と整えている人物がいる。

魔術コンビ、ジェットとドクター。炎と氷という本来相対する二つの魔術の利点を見つけたドクターが全ての指示を出している。うまくいけばこれでグスタフを駆逐できるかもしれないというわずかな希望に4人は頷き、行動に起こしていた。

作戦はこうである、接近戦専門の3人でグスタフに間髪を入れない連続攻撃をひたすらに続けさせる、反撃されることも明日かもしれないがそこは3人の力で何とかしてもらう他ないとドクターは釘をさす。その間にジェットは新しく手に入れた杖に跨り空で、ドクターはグスタフが中心になるように離れた場所から大きな円を足描く。この円はそれぞれ魔力を消費しながら描く立派な魔方陣であり、魔方陣から発動される魔術は詠唱系魔法に次いで強力な力を持っている。これをぶつけようというのだ。

空と大地に二つの魔方陣が完成した瞬間、ジェットがドクターに言われた通り3人に合図として空に魔術で小さな花火を打ち上げる。

それを確認した虎眼と猫眼は攻撃の手を止めて、グスタフから数歩分離れる。その間にアゲートの渾身の力を振り絞った一撃を鎚に乗せ、グスタフの顎を救い上げるように直撃させる。

戦いの最中に気が付いたことがあった、それはグスタフの肉体の事で奴は体に鉄を取り込んで全身の皮膚を硬質化してはいるが、それ以外の肉体の作りそのものは人間の頃と何も変わっていないということである。肉体を貫かれようがいくらでも回復できるダイヤモンドの回復術は厄介だが、それが発動しきる前に攻撃すれば何も問題などはない。

巨大な金属の拳で顎を砕かれたグスタフは、その衝撃で一瞬だけ脳みそが揺さぶられ脳震盪を起こしてしまう。そしてそのまま殴り抜けられることで空中高く舞い踊らされてしまった。

それでも意識を失ってしまうのは一瞬だけ、次の瞬間にはグスタフはもう意識を回復させてしまっている。だがそれで問題はない、ごくわずかな時間でも気を失っている間に虎眼と猫眼はすでにグスタフの目の前まで力強く跳躍していたのだから。

2人は完全にシンクロした呼吸で空中を一回転すると、お互いの右足をグスタフの分厚い胸板に叩きつける。

青龍脚限定奥義「双竜脚」

二つの衝撃をもろの受けたグスタフは岩肌の大地上に背中から落下した。そしてそこはまさしくドクターの描いた魔方陣の中心、作戦はすべてうまくいった。魔方陣の外へ3人が避難したことを確認すると、ドクターは砂の上に描いた円に両手を合わせ魔術を発動させる。

何が起こるのか内心ワクワクしている猫眼とアゲートを尻目に、ジェットも魔術を発動させる準備に取り掛かる。

直後・・・

バキイイイイイイイイイイン！！！！！！

強い日差しにより乾燥しきった砂の大地に、突如氷河が発生した。ドクターの描いた魔方陣の中でのみ、先端が鋭くとがった氷の大地が生まれたのだった。

「ブルー・コールリーフ」（青いサンゴ礁）と言う氷系最大級の魔術である。魔方陣の中に閉じ込められたグスタフの全身は氷の刃に貫かれ、凍りつき、動きを一時的に封じることに成功した。

一時的と説明するのは、無双モードのグスタフにこの魔術も効果は薄くすぐさま身をよじて身にまとわりつく氷を引き剥がし始めたからである。

だがそれも予定のうち、本命はジェットが空中に描いた魔方陣。ドクターの魔術発動に伴い、氷の大地から地上の4人は一斉に離れたのを確認するとジェットも魔方陣を発動させた。「デプス・ボム」と言う魔術なのであるが、これは魔方陣の中に吸収した魔力を炎の形に直し超圧縮、小さな疑似太陽を造りだし相手にぶつけるという「禁断の魔術」に相当する非常に危険な最上級魔術なのである。

その超小型太陽を魔方陣の中から大砲のように発射、グスタフめがけて、まっすぐに飛んでゆく。本来ならば瞬く間に万物を蒸発させてしまうほどの熱エネルギーがこの氷の大地に触れた瞬間どうなるか……

こうなってしまう。

チュボオオオオオオオオン！！！！！！

水蒸気爆発、水や氷が超高温に晒され一瞬で水蒸気になってしまう現象のことを気化、昇華と呼ぶのだが、それを大量の水を使って発生させることによって生じる爆発現象のこと。このエネルギーは火山の噴火を上回る、魔術だけでは到底及ばない自然災害現象に匹敵する。

ドクターの立てた作戦、グスタフの体を水蒸気爆発で一度木っ端微塵に吹き飛ばし、のちにジェットの魔術で粉々になった肉体の破片を瞬時に蒸発させてこの世から完全に消滅させてしまおうという計画だった。

作戦は見事上手くいった。水の体積が約1000倍に膨らんで発生する爆発現象に一行も巻き込まれてしまい、ドクターの描いた魔方陣から周囲数百mから1km圏内のあらゆるものが吹き飛ばされた。上空に待機していたジェットも爆風に巻き込まれ、まるで木の葉のように宙を舞い、どこかに墜落してしまった。

.....
.....

それから数分にわたって周囲に長い長い沈黙が続いた。それぞれ全く違う方向に避難していた一行はてんでバラバラに散らばってしまい、再集合するのに時間がかかってしまったのだ。一番に到着したのは、アゲートだった。水蒸気爆発の中心部から周囲100m以上に渡って巨大なクレーターが形成され、地面は10m程陥没している。このクレーターがあの大爆発の凄まじい威力を物語っている、アゲートはその恐怖から背筋がゾクゾクと寒気が襲うのだった。遅れて虎眼とドクターがやって来た。

「キシシシ・・・なんとか無事だったようだね」

「かるうじてな・・・しかしさすがにこの威力には驚かされたぞ、死ぬところだった」

「ほんと、マジで死ぬかと思ったさ」

「キシシシシシ、詮無きことよ。そのおかげで誰かさんは一片の細胞も残らず死んだのだからね」

「ッケ、言うじゃねえか！アタシャこんなことになるなんざ聞いてねえぞドクター！！」

「ヤッホー！皆生きてるカ～？」

緊張の糸が完全に見れてしまっている三人の前に、空から杖に乗ったジェットとそれにブラ下がって猫眼が降りてきた。二人とも砂にまみれてボロボロになっているが体はピンピンしている。何の問題もなさそうで、ようやく全員集合といったところであろう。

「キシシシシ、勉強が足りないよ男女くん・・・魔術だけではなくそれに伴い発動する科学現象もしっかり学んでおけば今のような合成魔術攻撃も可能となる。取り立てて名前はないが・・・合成魔術だから今後はこれを「カクテル・マジック」と呼ぼうかな？」

「知ったことじゃねえよ！！」

「砂漠でこれ以上喧嘩なんぞするな、これ以上は体力の無駄だ。そんなことより重要なことは・・・」

「お忘れてたさ、ダイヤモンド！」

本来忘れてはいけないことを忘れていた一行はようやく本来の目的を思い出し、一行は急いで爆発の中心点まで急いだ。

実を言うとジェットにはひとつだけ気になることがある。それはあの攻撃の影響でダイヤモンドが消滅していないかという不安だ。いくら強大な魔力の塊である宝石でも元はダイヤモンド、炭素の塊である宝石はあの炎の中で燃え尽きてやしないか気が気でないのだ。もし本当に燃えてしまっていたらどうやって責任を取ったらいいものやらと頭の中で思いつく限りの可能性がグル

グルと渦巻き、訳がわからなくなってくる。

しかしその心配は無事に無用なものとなった。いち早く爆発地点の中心地にたどり着いた虎眼が周囲を確認していると、少し離れた場所で光り輝いている物体を発見、急いでそれを確認するとダイヤモンドでピンゴした。

無事にダイヤモンドの回収に成功しホッと胸をなで下ろしながらダイヤモンドを拾った。

「・・・あったぞ！」

「おお、無事だったか」

拾ったダイヤモンドを頭上に掲げて皆によく見えるよう旗のように降っていると、虎眼の顔になにか雫が落ちてきた。天候は快晴、間違っても雨などではない。頬に落ちたそれを指ですくい取ると、ヌルリとした感触がした。

それを自分の目で確認すると・・・その液体の正体は血で間違いなかった。

赤黒く酸化し始めているその血が一体どこから落ちてきたのか考えていると、今度はダイヤモンドを握っている右手に生暖かい感触を覚えた。

してみると手や指の隙間からポタポタと血がとどまることを知らずに足元にたれ落ちていくのが見えた。

一体何が起きているのかダイヤモンドをよく観察してみると、虎眼からは見えなかったダイヤモンドの裏側にその正体は隠れていたのだった。

それはまるで肉片のようなおぞましい物体がダイヤモンドと部分的に一体化していた。血にまみれたそれは時折ビクビクと跳ねるように鼓動し、その度に肉片の内側から血液を吹き出している

。
この肉片・・・例えるならまるで心臓のような形をしているが・・・

.....
.....

それから数分にわたって周囲に長い長い沈黙が続いた。それぞれ全く違う方向に避難していた一行はてんでバラバラに散らばってしまい、再集合するのに時間がかかってしまったのだ。一番に到着したのは、アゲートだった。水蒸気爆発の中心部から周囲100m以上に渡って巨大なクレーターが形成され、地面は10m程陥没している。このクレーターがあの大爆発の凄まじい威力を物語っている、アゲートはその恐怖から背筋がゾクゾクと寒気が襲うのだった。遅れて虎眼とドクターがやって来た。

「キシシシ・・・なんとか無事だったようだね」

「かるうじてな・・・しかしさすがにこの威力には驚かされたぞ、死ぬところだった」

「ほんと、マジで死ぬかと思ったさ」

「キシシシシシ、詮無きことよ。そのおかげで誰かさんは一片の細胞も残らず死んだのだからね」

「ッケ、言うじゃねえか！アタシャこんなことになるなんざ聞いてねえぞドクター！！」

「ヤッホー！皆生きてるカ～？」

緊張の糸が完全に見れてしまっている三人の前に、空から杖に乗ったジェットとそれにブラ下がって猫眼が降りてきた。二人とも砂にまみれてボロボロになっているが体はピンピンしている。何の問題もなさそうで、ようやく全員集合といったところであろう。

「キシシシシ、勉強が足りないよ男女くん・・・魔術だけではなくそれに伴い発動する科学現象もしっかり学んでおけば今のような合成魔術攻撃も可能となる。取り立てて名前はないが・・・合成魔術だから今後はこれを「カクテル・マジック」と呼ぼうかな？」

「知ったことじゃねえよ！！」

「砂漠でこれ以上喧嘩なんぞするな、これ以上は体力の無駄だ。そんなことより重要なことは・・・」

「お忘れてたさ、ダイヤモンド！」

本来忘れてはいけないことを忘れていた一行はようやく本来の目的を思い出し、一行は急いで爆発の中心点まで急いだ。

実を言うとジェットにはひとつだけ気になることがある。それはあの攻撃の影響でダイヤモンドが消滅していないかという不安だ。いくら強大な魔力の塊である宝石でも元はダイヤモンド、炭素の塊である宝石はあの炎の中で燃え尽きてやしないか気が気でないのだ。もし本当に燃えてしまっていたらどうやって責任を取ったらいいものやらと頭の中で思いつく限りの可能性がグル

グルと渦巻き、訳がわからなくなってくる。

しかしその心配は無事に無用なものとなった。いち早く爆発地点の中心地にたどり着いた虎眼が周囲を確認していると、少し離れた場所で光り輝いている物体を発見、急いでそれを確認するとダイヤモンドでピンゴした。

無事にダイヤモンドの回収に成功しホッと胸をなで下ろしながらダイヤモンドを拾った。

「・・・あったぞ！」

「おお、無事だったか」

拾ったダイヤモンドを頭上に掲げて皆によく見えるよう旗のように降っていると、虎眼の顔になにか雫が落ちてきた。天候は快晴、間違っても雨などではない。頬に落ちたそれを指ですくい取ると、ヌルリとした感触がした。

それを自分の目で確認すると・・・その液体の正体は血で間違いなかった。

赤黒く酸化し始めているその血が一体どこから落ちてきたのか考えていると、今度はダイヤモンドを握っている右手に生暖かい感触を覚えた。

してみると手や指の隙間からポタポタと血がとどまることを知らずに足元にたれ落ちていくのが見えた。

一体何が起きているのかダイヤモンドをよく観察してみると、虎眼からは見えなかったダイヤモンドの裏側にその正体は隠れていたのだった。

それはまるで肉片のようなおぞましい物体がダイヤモンドと部分的に一体化していた。血にまみれたそれは時折ビクビクと跳ねるように鼓動し、その度に肉片の内側から血液を吹き出している

。
この肉片・・・例えるならまるで心臓のような形をしているが・・・

いや、まさか……

だがもしこれが心臓だとしたら、これは誰の心臓か？答えは簡単、ダイヤモンドを所持していたグスタフの心臓で間違いない。

ではなぜこんなものがここに？しかもなぜ動いて……

「……んん？」

決して思いつきたくなどなかったが、一瞬だけ嫌な予感が虎眼の頭の中をよぎった。

そしていつものことながら……こう言った予感は大体的中してしまうのがお約束。

ビュンッ！！

虎眼の背後の砂の中から、猛スピードで一本の槍が飛んできた。少しだけ気の抜けていた虎眼はこれに対応できず、飛来した槍が脇腹を的確に貫かれてしまった。久しい激痛から表情が曇り、嗚咽を漏らしながら体がよろけ、せっかく拾ったダイヤモンドを取り落としてしまった。

直後、足元に落としたダイヤモンドをまるで拾うかのように、砂の中から今度は一本の腕が出現しダイヤを奪い取ってしまった。脇腹の槍をへし折り、急いでダイヤモンドを奪い返そうとした矢先、カウンターのように砂の中からもう一本の腕が生えだし、できたばかりの傷口をえぐるように拳を叩き込まれた。

刺し所が悪かったのかもしれない……虎眼はそこから数m吹き飛ばされ、ここ何年も体験していない深い刺し傷の痛みには耐えかねて血を吐き出し、苦悶な表情で身をよじりながら上半身を持ち上げた。遅れて他の連中も駆け寄って虎眼を囲むように整列すると、二本の腕の持ち主が砂の中からゾンビのように現れた。

その姿は……正真正銘のゾンビで間違いない。全身の肉の半分がただれて削げ落ち、重度の火傷で生まれた傷は氷の影響で中途半端に冷やされたことで腐り、凄まじい腐敗臭を漂わせている。頭もほとんどのパーツが欠如し、元の間でいたころの面影が微塵も存在していない。目玉も歯も失われ、砕けて閉じるのできなくなった顎からは腐った内臓や肉片と血を吸った砂が零れ落ちている。

しかし、ほとんど骨だけになっている右手は確かにダイヤモンドを握っている。

「……ば……バケモノさ」

「バケモノ、で済まされる生命体かねえ？」

化け物と称されたその死体もどきは手にしたダイヤモンドを崩れてポッカリ穴の開いた胸の中に無理やり押し込んだ。邪魔になる骨を自ら砕きながら、まるで元のあるべき場所に戻すように、無理やり押し込めるのだった。

するとどうだろうか、胸の中に押し込まれたダイヤモンドが突如強烈に発光し始めた。一瞬目が

くらんで思わず全員両目を覆ってしまった。故にこの光の中で何が起きたか見た者はいない。ダイヤモンドの輝きは、ある種の軌跡をこの死体もどきに与えるのだった。全身の火傷が回復し元の張りのある浅黒い人間の肌を取り戻し、失われた肉片、目玉、内臓、口内の全ての歯から髪の毛に至るまで必要なものはすべて蘇り、焼失した衣類まで元の姿に戻ってしまった。光が治まり、今一度光の元を確認してみると・・・そこには一同共通の絶望が笑みを浮かべて立っていた。

カール・グスタフ・・・彼はあの大爆発の中からも蘇ることに成功してしまったのだった。一度は死体の成り果ててしまいながらも、バラバラになってしまった肉片に残留していた魔力で散らばった肉体をかき集め、再びダイヤモンドを心臓に収めることで元の姿へと転生することに成功したのだ。生憎体の表面を鉄にすることはできなかったが、今は何の問題もない。なぜなら、今の攻撃のおかげでもっと面白いおもちゃを手に入れたのだから、今はそれを試したくて試したくてうずうずしている。

「我は・・・神なり」

恐怖と絶望の淵に立たされた一向に向かい、グスタフはトドメの一言をかけてやった。この一言で、一行は自分たちの勝機を完全に失われてしまったことを自覚させられる。もう打つ手はない、倒す方法はない、今から殺されるのは自分達だと・・・

「URRREEEEYYYY!!!」

我慢しきれなくなったグスタフが前傾姿勢で走り出し、一行へ向かい突っ込んだ。野牛のような威圧感を放つ突進をただ惚けながら見ている5人だったが、直前まで迫ってきたところでようやく意識が回復した。

5人とも急いで左右に富んでこの攻撃をかわしたが、アゲートだけがタイミングを外しくスタフの拳が右足の踝に強くめり込んだ。激痛に悲鳴を上げながらアゲートはそのままプロペラのように空中を回転して砂の上に落とされた。

それだけならまだいい、グスタフはここでもうすでにさっき手に入れたばかりの『おもちゃ』を使って・・・アゲートを最初の的として使い遊んでいた。結果は良好、アゲートにとって最悪のプレゼントを渡すことに成功する。

アゲートが凄まじい悲鳴を上げた。殴られた痛みではない、自分の脚にまとわりついた例の『おもちゃ』がアゲートの足を蝕んでいるのだ。

グスタフの拳を受けたアゲートの右足の足首から先が、あろうことか凍りついているのだった。砂漠の砂と太陽で熱せられた肌にこの氷は堪えるようで、アゲートは足を抱えたまま砂の上で激しく悶え転がっている。

「凍る！冷たい・・・痛iiiiiiii!!!」

「バンダナ君、しっかりしたまえ!!!」

「アゲート!! 貴様ああああ!!!」

「あの野郎・・・うちの何しやがった!？」

身内の人間への予想外の攻撃に戸惑いを隠せない一行は怒りをあらわにし、一声にグスタフを睨みつけた。当の本人は一切悪びれる様子などなく、むしろその結果に大満足の表情を浮かべている。虫に睨まれた程度で、何の恐怖など感じはしない。今のグスタフにとって連中などその程度の存在でしかないのだ。

「くくくく・・・もしかしたらと思ってやってみたが、案外うまくいったようだな。この凍てつく冷気、そこの白髪のチビがよく知ってるのではないかね？」

白髪のチビ・・・全員が一斉にアゲートの介抱をするドクターへ向き直った。（結構失礼な話だがそれは事実）

一体何のことかよく分からないが、ドクターは急いでアゲートの足を布でくるみながら擦り氷を

溶かそうとする。だがその直前、氷に触れたドクターはその氷に身に覚えを感じ手を止めてしまった。

この氷には魔力が注がれている・・・ドクターはすぐにそれを感じとるのだった。そしてその魔力には覚えがある。

「この氷・・・まさか小生の？」

「その通りだ！貴様のこの氷の魔力、この私が有効的に活用させてもらうぞ！！」

そう言うや否や、グスタフの両拳から青白い光が、あたかも燃え盛る炎のように輝き出した。その光は可視化された魔力の光、そしてその魔力は間違いなくドクターが放った魔力で間違いなかった。

信じられない話だが、グスタフは物質のみに非ず他人の魔力まで吸収することにまで成功していたのだった。

これが今グスタフの言っていた『おもちゃ』の正体、ドクターの氷の魔術から魔力を吸収し、それを体内でコントロールするという最悪の能力。あの爆発の中で生き延びただけでも驚愕なのに、魔力まで盗んで自分の者にされたとあってはもう目も当てられない。

愕然としたドクターは肩を落とし、自らが計画した作戦の失敗と激しい後悔に背中から押しつぶされ、項垂れてしまった。

「触れられただけで凍りつく拳か・・・厄介だな」

「すまない・・・全て小生の浅はかさのせいで招いた失敗だ」

「問題ねえよ、お前の氷くらいアタシが全部溶かしてやる！ドクターはアゲートを何とかしてやりな」

「何が起きても、ドクターだけは守って見せるネ！！」

「姉御オレっちは？・・・痛ってえ、冷てえ！」

「キシシ・・・申し訳ない」

もうこれ以上いちいち邪気に飲み込まれている場合ではない、勝てる見込みはもう0に等しい数字になっているが完璧な0ではないと信じ、猫眼とジェットがグスタフへ特攻を仕掛けた。あの拳にだけとにかく気を付けさえすればいいと考え、ジェットと連携を取る。

先頭に立ったジェットが魔術を発動、バージン・メアリーによる無数の火弾がグスタフを強襲する。しかしこのような魔術ではもとより効果などない、迫りくる全ての火弾を拳ひとつで弾き返して見せた。それでもなおジェットは攻撃をやめない、グスタフの周囲を時計回りで旋回しながら絶え間なく火弾を浴びせ続け、一定の距離を保っている。

無数の火弾に注意が注がれているこの隙に猫眼は空中へ高く跳び上がり、がら空きになった背中に狙いをつけるように着地した。狙いは成功、ジェットの揺動で意識が集中しているうちに猫眼は砂を蹴り、猫眼の得意とする足技を炸裂させる。

曰く「十二星拳」の一つ、「天蝸殺」。加速で勢いを付けた両足を駆使して跳躍、空中で回転しながらグスタフの頭に狙いを定めて落下。加速、跳躍、落下、回転、筋力、全ての力を爪先に集約し、猫眼は回転しながらグスタフの顔面へその爪先を突きたてた。

攻撃をモ口に喰らったグスタフはそのまま遠くまで吹き飛ばされ、今度はジェットが本激に移る番となった。

魔力を体外に放出し魔人プロメテウスを召喚、さらに魔力を操作し一体のプロメテウスを十対まで分割させる。ジェットの開発したオリジナル魔術、プロメテウス改め「紅蓮の従者」。

従者はジェットの指示を受けグスタフの元へ集結、砂の上に転がったグスタフを囲むと己の魔力全てを使い炎でグスタフの身を焼き尽くした。

これならどうだ？と思いながら燃え盛る様を見守っていると、またもジェットの表情が曇った。燃え盛る炎は徐々にその勢いを弱め、次第に焚火からマッチの火まで小さくなりとうとう消え失せてしまった。半分予想はしていたが、こうもうまく予想が的中してし合うのも困り者だ。

魔力とは一人の人間に対して一つの属性しか身に宿すことができない。それが基本なのだがグスタフはその常識も打ち破っている。

奴はジェットの炎を食っていた。口から炎を吸い込み、くちゃくちゃと咀嚼しながら全ての炎を・・・ジェットの魔力までも自らの体内に吸収してしまったのだ。氷と炎、相反する二つの魔力を同時に一つの体に宿そうものなら、魔力同士が反発しあい体内で爆発してい舞うのではないかとも考えていたが・・・そううまく話は転がってくれなかったようだ。

「畜生・・・アタシの魔力まで」

「クククク・・・なかなかうまい火だな。これはその・・・お返しだああ！！！」

立ち上がったグスタフは大きく息を吸い込むと、大きく口を開き吸い込んだ息を吐き出す。それだけではない、吸収したジェットの炎も一気に吐き出し、火炎放射器のような火炎がジェットへ襲い掛かった。

避けようとしたがこの時ジェットは魔力を消費しすぎていた。フェイファー軍への総攻撃、杖での飛行、デプス・ボムの発動、そして今の攻撃でジェットの魔力は限界がきてしまった。特にデ

プス・ボムにいたっては、本来複数人の魔術師の魔力を集結させて初めて発動することのできる最上級魔術なのに、それを一人で発動させること自体に無理があった。魔力とは人間の精神力、ほとんどの精神力を使い果たしたジェットは一瞬立ちくらみを覚え逃げ出す前にその場で膝をついてしまう。

避けきれない。

「ジェットオオオ！！！」

その直前、追いついた猫眼がジェットの上に覆いかぶさった。

ボオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

ダイヤモンドの魔力で力を増幅した炎が二人を飲み込み、周囲の岩や大地をも焼き尽くしながら一直線に噴射し続けた。

やがてグスタフの体内からジェットの魔力が底をついて炎が止むと、周囲はすでに地図を書き換えることすら視野に行けないほど地形が変化してしまっていた。

離れていた場所で見守っていた残りの三人は、その中で二人の人物を見つけ目を丸くする。

炎の渦からジェットを守るため身を挺した猫眼は、背中を焼け爛れさせながらもジェットを守りきることに成功した。自らの腕の中で動揺するジェットの顔を確認し、生きていることを知ると猫眼はニコッと笑みをこぼし・・・そのままジェットからスルリと離れ、倒れてしまった。

クター、立ち上がる力さえ残されていない氷漬けの虎眼。
砂漠の大地に、5人分の死体があっという間に完成された。

「ハハハハハハハハハハハハ！！！！凄い、凄いぞダイヤモンド！！まだ力を感じる、まだ私の知らない力が溢れ出しているんが分かるぞダイヤモンド！！このまま世界は、全てこの私の者となるのだ、ハハハハハハハハハハハハ！！！！」

もう誰もあの男と止めることはできないのかもしれない、怒りに任せ全ての力を出し切ってもなお勝つことのできなかつた正真正銘の化け物。生きる希望を見失った一行は素直に負けを認め、このままゆっくり息を引き取ることすら覚悟した。

やれることはやったのだ・・・仕方がない。

なんて理由でむざむざ死んでなどいられい。

往生際の悪い男がここに、ジン意外にまだ一人だけいた。全身から血を流し、内臓を痛めた影響で胃の中から逆流する血を吐き出し、凍傷になった拳と膝をで体を支えながらゆっくりと立ち上がる男がいた。

笑いが止まったグスタフがその男を見やると、そいつは虎眼だった。利き腕の拳と脚一本を封じられてもなお戦うことをやめようとしないその姿勢に、グスタフは嫌悪した。あの時闘ったジンを思い出してしまって気分が悪い。

虎眼自身はと言えば、すでに意識はない。ただ無意識のうちに立ち上がり、無意識のうちに歩き始め、無意識のうちにグスタフへ戦いを挑もうとしているのだった。

その根性だけは天晴と言う他ないが、これ以上しつこく付きまとおうとするのは気に入らない。ノロノロと亀のような歩調で長い時間をかけ、ようやく目の前までたどり着いた虎眼は、左の拳を自分の胸にぶつけるのだった。ぶつけると言っても、その拳はもう虫も殺せないような力の無い攻撃だった。

虎眼の体をぬいぐるみのように持ち上げても、何の反撃も仕掛けてはこなかった。今の子の姿はぬいぐるみと言うより糸の切れたマリオネットと呼ぶのに近い。壊れたおもちゃに興味を示す子供などいない、グスタフは虎眼の体を両手で持ち直すと、そのまま雑巾を絞るように全身をひねり、潔く殺してやろうと考える。

ドガンッ！！

直前、グスタフの脇腹に激痛が走り、虎眼を手からこぼしてしまった。おまけに肝臓を強く打ちこまれたのか痛みが体の芯まで沁み広がり思わず片膝をついてしまった。さらに立て続けに首に真横から強い衝撃が襲い、グスタフは虎眼から引き離される様に吹き飛ばされてしまった。

本来ならこれで首の骨が砕け死に至るのだろうが、今のグスタフならばこの程度数秒で完治してしまう。骨の具合を微調整するようにボキボキと左右に振りながら今さっきまで自分の立っていた場所を見直すと、そこには意外な人物がいた。

真っ先にくたばっていたとばかり思っていたあの女・・・猫眼だった。あの瀕死状態の大火傷から目を覚ましたことも驚きだが、今の猫眼にはもう余裕はなさそうだった。もとより残りの体力が一桁まで削られていたのにグスタフの大柄な体を吹き飛ばすほどの攻撃を仕掛けた猫眼の体は

、もう限界を突破して棺桶に片足を突っ込んだような精神状態となっている。

あの一撃が精いっぱい、意気が上がりもが回りだした猫眼はそのまま虎眼の上にかぶさるように倒れてしまった。呼吸も絶え絶えで、まさに虫の息である。

「んん～・・・まだ生きていたとは意外だったぞ小娘。だが、それもこれでおしまいと見える」

のっそりとグスタフが立ち上がると、悠々とした歩調で猫眼の元まで近づき片手で彼女を持ち上げた。一度は間違いなく死にかけたが、一度意識を取り戻した彼女の目は死んではおらず、グスタフの手の中においても毅然とした表情で睨んでいる。

「あのまま大人しくしていれば楽に死んでいられたものを・・・物好きな小娘だ」

「ニヤハハ・・・一つ感謝が言いたかたネ。生まれてこの方25年間一つの肉体を共有し続けてきた生活にオサラバできたのはお前のおかげヨ」

「この期に及んでうれしいことを言うねえ。どういたしましてってところか？」

「けどね・・・虎眼も元々は私の体、自分の体を好き勝手にボロボロにされたら起こるの当たり前ネ！せめて最後に一矢報いたかったヨ」

「それはそれは、こんな形になってしまい残念だったなあ、ええお嬢ちゃん？」

「その通りヨ・・・殺したきゃ殺せ、だけど、私以外の皆にはこれ以上手を出すナ！」

「・・・・・・・・・・いいだろう」

グスタフはこんな口約束など守る気など毛頭ない。死人に口なし、ここまで手こずらせた連中の死体はバラバラに刻んでドラゴンの餌にしてやるのに限る。昔からそうしてきたように、これからもそうする。

軍利器を上回る握力が、徐々に猫眼の体を締め付け始めた。このまま握りつぶすつもりらしい。掌の中で猫眼の骨が軋み、徐々に折れていく感触を確かめながら少しずつ少しずつ、痛みを限界まで与えるように締め付けていく。

圧力が増すたびに猫眼は奥歯を食いしばり、今にも死んでしまいそうな激痛に表情を曇らせながら苦しみをあらわにする。喉の奥から小さな悲鳴が鳴り、骨が折れる度に血が噴き出してくる。しだいに猫眼の目からは涙が流れ、声も出せなくなった喉で最後の言葉を残そうとする。

(・・・ドクター・・・・・・・・ごめん)

握力を後1kg増したら確実に死んでしまうことを確信したグスタフは、表情を全く変える事無く握力を強める。

ヒィィィィィィィィィィィン・・・・

ドバァァン！！

グスタフの頭が、突然破裂した。何の前振りも無く、まさに突然すぎる現象に驚かされてしまった。

一瞬握力を失ったグスタフは猫眼を手の中からこぼし、虎眼の上に落としてしまった。何が起こったのかも気になるが、両手足と内臓までボロボロになった猫眼はそれを確認する余裕もない。破損した頭を回復させると、グスタフは今一瞬だけ突き刺すような痛みが走った方向を見やった。人間の目から見れば、その方向には何も見えない、砂と岩しかない光景なのだがグスタフは違う。望遠鏡のような視力は的確にその正体を捉えている。

バイクだ。一台のバイクがこちらへ向かって真っすぐ走ってくるのが見えた。サイドカー付きの大型のバイクに二人が乗っているのを確認できる。片方はバイクに跨り運転をし、もう一人はサイドカーに乗って筒状の物体をこちらへ向けている。筒状の物体は何かのライフルと見て間違いない、あのバイクに乗っている誰かが、この距離でグスタフの脳天を「狙撃」したのだ。

「・・・当たりましたか？」

「ああ、二発目はどうすりゃいいんだ！？」

「トリガーの上の所に排莖用のレバーがあります、それを一度引いてもう一度同じ場所に戻せば次弾が撃てます！」

「あいよ！」

男は言われるままに片腕一本でレバーを引くと、さっき撃った時と同じ様にライフルを足で支えて照準を合わせる。射撃用スコープを覗くとこちらを向いているグスタフの顔がハッキリと見えるのが少し面白かった。ついでにスコープの視野の中に見える複数人分の死体も見えてしまい、男は奥歯をかみしめた。

自分の中の感情を弾丸に乗せ再びトリガーを引くと、バレルの中で小さな爆発が起こり弾丸が発射された。

弾丸はまるで重力を無視したかのようなスピードでグスタフまで一直線に飛来すると、今度は正確にグスタフの目玉を貫通した。次は鼻を、耳を、喉を、胸を、頬を、肩を、次々に発射される弾丸はグスタフの体のあちこちに風穴を開けてしまう。

ブoooooooooooo！！

バイクの激しい排莖音が次第に近づくにつれて、気を失っていたドクターとアゲートがゆっくりと目を開いた。

グスタフの残された片方の目玉がバイクを至近距離でとらえた時、あろうことかバイクは空へ跳

躍した。空と言っても5 m程度の高さで、バイクは空中から突進するようにグスタフへ迫りくるのだった。

その刹那、グスタフは自分に向かって銃口を向けているサイドカーの人物の顔を見て驚かされる。しかしそれは声に出すより先に吹き飛ばされてしまった。サイドカーに乗っている男が手にしている銃はライフルではなく、今度はショットガンだった。至近距離から発砲されては、いくらグスタフと言えど肉体が耐え切れず頭半分が吹き飛ばされるのと同時に、全身でツッコんできたバイクに跳ね飛ばされてどこかへ消えてしまった。

さらに、着地の反動に耐えられなかったサイドカーの乗車員がそのままバイクから放り出されてしまい、砂の上に転がされてしまった。

「痛ってええ！！病み上がりなんだからもっと慎重に運転しろよ！！殺す気かテメーは！！」
「すみません、ここまでアクロバットな運転は初めてでして、その・・・勝手がいまいちアレな感じで」

男の声を聞いた途端、死にかけていた5人全員が飛び起きて男の正体を確認した。意識を失って半分死んだ状態になっていた虎眼ですら一瞬で目を覚まし、上半身を持ち上げて向き直ったぐらいだ。

なぜならこの男の声には聞き覚えがある。毎日聞き続けているあの男の声。

ズボラで、テキトーで、いい加減な性格で、気に障る、反感を買うようなセリフで、人にケンカを売るようなこの態度。

間違いなかった。男の正体を知った時、5人は歓喜に溢れ男の名を呼んだ。

ヒィィィィィィィィィィィン・・・・・・・・

ドバァァン！！

グスタフの頭が、突然破裂した。何の前振りも無く、まさに突然すぎる現象に驚かされてしまった。

一瞬握力を失ったグスタフは猫眼を手の中からこぼし、虎眼の上に落としてしまった。何が起こったのかも気になるが、両手足と内臓までボロボロになった猫眼はそれを確認する余裕もない。破損した頭を回復させると、グスタフは今一瞬だけ突き刺すような痛みが走った方向を見やった。人間の目から見れば、その方向には何も見えない、砂と岩しかない光景なのだがグスタフは違う。望遠鏡のような視力は的確にその正体を捉えている。

バイクだ。一台のバイクがこちらへ向かって真っすぐ走ってくるのが見えた。サイドカー付きの大型のバイクに二人が乗っているのを確認できる。片方はバイクに跨り運転をし、もう一人はサイドカーに乗って筒状の物体をこちらへ向けている。筒状の物体は何かのライフルと見て間違いない、あのバイクに乗っている誰かが、この距離でグスタフの脳天を「狙撃」したのだ。

「・・・当たりましたか？」

「ああ、二発目はどうすりゃいいんだ！？」

「トリガーの上の所に排莖用のレバーがあります、それを一度引いてもう一度同じ場所に戻せば次弾が撃てます！」

「あいよ！」

男は言われるままに片腕一本でレバーを引くと、さっき撃った時と同じ様にライフルを足で支えて照準を合わせる。射撃用スコープを覗くとこちらを向いているグスタフの顔がハッキリと見えるのが少し面白かった。ついでにスコープの視野の中に見える複数人分の死体も見えてしまい、男は奥歯をかみしめた。

自分の中の感情を弾丸に乗せ再びトリガーを引くと、バレルの中で小さな爆発が起こり弾丸が発射された。

弾丸はまるで重力を無視したかのようなスピードでグスタフまで一直線に飛来すると、今度は正確にグスタフの目玉を貫通した。次は鼻を、耳を、喉を、胸を、頬を、肩を、次々に発射される弾丸はグスタフの体のあちこちに風穴を開けてしまう。

ブoooooooooooo！！

バイクの激しい排莖音が次第に近づくにつれて、気を失っていたドクターとアゲートがゆっくりと目を開いた。

グスタフの残された片方の目玉がバイクを至近距離でとらえた時、あろうことかバイクは空へ跳

躍した。空と言っても5 m程度の高さで、バイクは空中から突進するようにグスタフへ迫りくるのだった。

その刹那、グスタフは自分に向かって銃口を向けているサイドカーの人物の顔を見て驚かされる。しかしそれは声に出すより先に吹き飛ばされてしまった。サイドカーに乗っている男が手にしている銃はライフルではなく、今度はショットガンだった。至近距離から発砲されては、いくらグスタフと言えど肉体が耐え切れず頭半分が吹き飛ばされるのと同時に、全身でツッコんできたバイクに跳ね飛ばされてどこかへ消えてしまった。

さらに、着地の反動に耐えられなかったサイドカーの乗車員がそのままバイクから放り出されてしまい、砂の上に転がされてしまった。

「痛ってええ！！病み上がりなんだからもっと慎重に運転しろよ！！殺す気かテメーは！！」
「すみません、ここまでアクロバットな運転は初めてでして、その・・・勝手がいまいちアレな感じで」

男の声を聞いた途端、死にかけていた5人全員が飛び起きて男の正体を確認した。意識を失って半分死んだ状態になっていた虎眼ですら一瞬で目を覚まし、上半身を持ち上げて向き直ったぐらいだ。

なぜならこの男の声には聞き覚えがある。毎日聞き続けているあの男の声。

ズボラで、テキトーで、いい加減な性格で、気に障る、反感を買うようなセリフで、人にケンカを売るようなこの態度。

間違いなかった。男の正体を知った時、5人は歓喜に溢れ男の名を呼んだ。

ヒィィィィィィィィィィィン・・・・・・・・

ドバァァン！！

グスタフの頭が、突然破裂した。何の前振りも無く、まさに突然すぎる現象に驚かされてしまった。

一瞬握力を失ったグスタフは猫眼を手の中からこぼし、虎眼の上に落としてしまった。何が起こったのかも気になるが、両手足と内臓までボロボロになった猫眼はそれを確認する余裕もない。破損した頭を回復させると、グスタフは今一瞬だけ突き刺すような痛みが走った方向を見やった。人間の目から見れば、その方向には何も見えない、砂と岩しかない光景なのだがグスタフは違う。望遠鏡のような視力は的確にその正体を捉えている。

バイクだ。一台のバイクがこちらへ向かって真っすぐ走ってくるのが見えた。サイドカー付きの大型のバイクに二人が乗っているのを確認できる。片方はバイクに跨り運転をし、もう一人はサイドカーに乗って筒状の物体をこちらへ向けている。筒状の物体は何かのライフルと見て間違いない、あのバイクに乗っている誰かが、この距離でグスタフの脳天を「狙撃」したのだ。

「・・・当たりましたか？」

「ああ、二発目はどうすりゃいいんだ！？」

「トリガーの上の所に排莖用のレバーがあります、それを一度引いてもう一度同じ場所に戻せば次弾が撃てます！」

「あいよ！」

男は言われるままに片腕一本でレバーを引くと、さっき撃った時と同じ様にライフルを足で支えて照準を合わせる。射撃用スコープを覗くとこちらを向いているグスタフの顔がハッキリと見えるのが少し面白かった。ついでにスコープの視野の中に見える複数人分の死体も見えてしまい、男は奥歯をかみしめた。

自分の中の感情を弾丸に乗せ再びトリガーを引くと、バレルの中で小さな爆発が起こり弾丸が発射された。

弾丸はまるで重力を無視したかのようなスピードでグスタフまで一直線に飛来すると、今度は正確にグスタフの目玉を貫通した。次は鼻を、耳を、喉を、胸を、頬を、肩を、次々に発射される弾丸はグスタフの体のあちこちに風穴を開けてしまう。

ブoooooooooooo！！

バイクの激しい排莖音が次第に近づくにつれて、気を失っていたドクターとアゲートがゆっくりと目を開いた。

グスタフの残された片方の目玉がバイクを至近距離でとらえた時、あろうことかバイクは空へ跳

躍した。空と言っても5 m程度の高さで、バイクは空中から突進するようにグスタフへ迫りくるのだった。

その刹那、グスタフは自分に向かって銃口を向けているサイドカーの人物の顔を見て驚かされる。しかしそれは声に出すより先に吹き飛ばされてしまった。サイドカーに乗っている男が手にしている銃はライフルではなく、今度はショットガンだった。至近距離から発砲されては、いくらグスタフと言えど肉体が耐え切れず頭半分が吹き飛ばされるのと同時に、全身でツッコんできたバイクに跳ね飛ばされてどこかへ消えてしまった。

さらに、着地の反動に耐えられなかったサイドカーの乗車員がそのままバイクから放り出されてしまい、砂の上に転がされてしまった。

「痛ってええ！！病み上がりなんだからもっと慎重に運転しろよ！！殺す気かテメーは！！」
「すみません、ここまでアクロバットな運転は初めてでして、その・・・勝手がいまいちアレな感じで」

男の声を聞いた途端、死にかけていた5人全員が飛び起きて男の正体を確認した。意識を失って半分死んだ状態になっていた虎眼ですら一瞬で目を覚まし、上半身を持ち上げて向き直ったぐらいだ。

なぜならこの男の声には聞き覚えがある。毎日聞き続けているあの男の声。

ズボラで、テキトーで、いい加減な性格で、気に障る、反感を買うようなセリフで、人にケンカを売るようなこの態度。

間違いなかった。男の正体を知った時、5人は歓喜に溢れ男の名を呼んだ。

「とにかくメガネ君は一度ここから離れよう、傷の処置をしなければガチで危険だよ」

「そのことなんだがドクター、それとジェット・・・折り入って頼みがある」

「ああ、何だよ？」

「ゆっくり話している暇もなさそうだぞ貴様ら、今はとにかくあいつを・・・ガハ！！」

「兄貴い！！」

「私、もう動けそうにないネ」

「んん・・・あい分かりました、ここは僕が引き受けましょう！！」

傷だらけの一行の姿を見かね、ここでコルトが大きく手を挙げた。一瞬全員がその行動を疑い、グスタフのいう男が今どれだけ危険な存在なのかを説明するが、それでもコルトはケロリとした態度を取っている。

本人はたった一言、

「大丈夫です、僕強いですから！」

とても信用しにくい自信だった。言っちゃあ悪いがこの貧相な体つきでどうやってあのグスタフと渡り合うつもりなのか皆目見当がつかない。

そんな心配をよそに、コルトはバイクから自分の荷物・・・大きなゴルフバックを肩に担いでグスタフの元へ走って行ってしまった。

あそこまで自身に満ち溢れているのならもういっそのこと任せてみようかと結論付け、こちらもちらで急いで次の行動をとることとした。

一行は体を引きずりながら近くの大きな岩場の影まで避難すると、急いでドクターの治療を受けることとした。真っ先に治療を開始したのはもちろんジン、ちょん切れた腕と足の強引な縫合を見た時から激しい苛立ちを覚え、早くこれを正しく縫い直したくて仕方なかった。

「残念だが麻酔がない、かなり痛いと思うが我慢してくれよメガネ君」

「そんなことはどうでもいい・・・と言うかドクター、テメエの頭を貸してほしい。それとジェット、お前もだ」

「？そーいや頼みがあるとか言ってたけど、何のようだ？」

「単刀直入にいう・・・俺は今すぐ魔術が使いたい、俺だけの魔力が欲しい」

ここに来るまでの道中、ジンはグスタフに対抗するための方法を考えてみた。その結果思いついたのが自分がまだ使えない「魔力」と「魔術」の会得。

長い精神修行をしなければ精神力は魔力として開眼しないと聞いてはいるが、そんなまだるっこしい方法なんぞクソ喰らえである。

大至急今すぐに魔力が欲しい・・・どんな方法を使っても、どんなリスクを背負っても、どんな外法でも、どんな違法でも、とにかく魔力が欲しい。魔術を使えるようになれば、うまく使いこ

なせれば、もしかしたら何かしら対抗策が浮かぶかもしれない。

それがジンの思いついた方法だった。

「馬鹿か君は！！魔力というのは欲すれば簡単に手に入るようなものではないのだぞ！？」

「お前なあ、アタシがここまで魔術を磨くのに何年かかったと思ってんだ？魔術を甘く見んじゃねえぞバカタレが！！」

「無茶を言ってるのは百も承知だ・・・だがオレはもう負けたくねえ、次こそ確実にあの野郎をぶち殺す為には絶対的に力が必要なんだ」

「ジン・・・貴様・・・」

「バカで結構、この喧嘩逃げるわけにはいかねえ。方法があるはずだ・・・ドクター、ジェット、何かあるんじゃないか？この場で魔力を手に入れることができる危険な方法が？」

「ちょっと待たせジン、いくら何でも結果を先走り過ぎさ！」

「どんなに危険な方法でもいい、リスクなんざいくらでも背負ってやる。どうせ一回死んだ身なんだ、もう一度あの世に行くくらいなんでもねえ。気の済むまで徹底的に暴れ回った後であの世に行く方が何兆倍もマシだ！！」

メガネを失ったジンの目は、いつになく本気の眼差しをしている。理由は少し不純だが、胸に決めた覚悟は本物中の本物。その本物の度胸に虎眼は今一度感服し、自分の中でもう一度ジンに負けを認めた。

「・・・ドクター、俺からも頼む、ここまで言っている男の気持ちを無碍にするのは無粋だ。何か方法があるなら教えてやってくれ」

「兄貴まで何言ってるさ！？ただでさえジン死にそうなのにそんなことしたら今度こそ本当に」

「・・・・・・・・良いだろう、一つだけ方法がある」

ドクターが二人の思いを汲み取り、重い腰を上げた。ジェットはまだ納得していないのだが、口は挟まずドクターの言うその方法とやりに耳を傾けることに徹しさせてもらった。

「人間の体内に眠っている魔力と言うのは、小生に言わせれば古い井戸のようなものだと考えている」

「古い井戸？・・・その心は？」

「井戸から水をくみ上げる正しい方法が井戸の改装、これを「修行」と表現しよう。しかし水をくみ上げる方法はもう一つだけある」

「ドクター・・・何が言いてえんだ？」

「井戸の中に外から直接水をぶち込み、寄せ水効果で地下から水をくみ上げる。これをこの場では「外法」と呼ぼう」

寄せ水・・・ジンも昔から体験したことのある現象であった。たとえば川に落ちて耳の中に水が入った時、頭を傾けても簡単に水が出てこないことが多い。そんな時は耳の中に一度水を入れて、耳の中を水で満たしてからもう一度頭を傾ければ簡単に水はすべて抜けてくれる。あれのことだ。

体内に眠っている魔力を、外側から魔力を流し込んでつかみ取り、体外に魔力を引きずり出すと言うのがドクターの言うところの説明である。

しかしそれはあくまで水に限った話。本当にそんな方法が可能なのか魔術師であるジェットには疑問が残る。

「成功する確率は？」

「正味な話、5%以下。長い魔術の歴史上においてこの方法を試し成功した人物は片手で数えるほどしかないと聞く。しかも魔力を引きずり出すのに失敗した場合、その人物は精神が崩壊してやがて死んでしまうというパターンが通例だとか」

「おっかないヨ！！」

「よしわかった、他探そう！！他の方法を見つけようさ！！」

「ドクター、その方法で試せるか？」

アゲートの提案を完全に無視し、ジンは寄せ水ならぬ寄せ魔力に全てを賭けることを覚悟した。ハイリスクハイリターン、上等な話であるとジンは考えるが、それにはアゲートが猛反発した。しかしそれすらもサラリと流し、急いで行動に移すように頼む。

「念のため確認するが本当にいいのだね？死ぬかもしれないよ？」

「言ったばっかだろ？オレはもう一回死んでんだ」

「・・・・・・・・・・良いだろう、男女君手伝いたまえ」

「ああもう、勝手にしろ。そんなに死にたきゃ勝手に死ね」

「応よ、勝手に死ぬさ」

緊張感のあるのか無いのかよく分からない不毛な会話に嫌気がさし、ジェットは渋々ドクターの指示に従い言われた通りに動いた。

ドクターは自分の記憶を頼りに寄せ魔力の外法を発動させるのに必要な魔方陣を地面に描かせた。

完成した魔方陣の上にジンを横たわせると、ドクターの指示でジンの四肢を残りの全員で拘束した。この外法には激しい苦痛を伴い、しかも成功させるためには何度も何度も同じ行為を繰り返し替えさなくてはならない場合もある。暴れたりしたら面倒くさいのでしっかり押さえもませるように4人に命令をする。

「では始めるよメガネ君。小生の魔力を体内に注入してキミの魔力を引っ張り出す。小生の氷と相性が合わない場合相当苦しくなるだろうが我慢したまえ」

「能書きはもう十分だ、さっさと始めろ」

時間がないのはみんな同じこと、同じことをベラベラと喋っているくらいならさっさと終わらせた方がよっぽど有意義と言う話だ。

それに共感したドクターは早速口を閉じ、右手に自らの魔力を集中させる。蒼く燃え上がるような魔力を纏ったドクターの手の平がジンの胸の上にあてがわれると、地面の魔方陣が淡く輝き出した。

「フゥ・・・・・・・・・・気合を入れたまえ！！」

ドクターが最後にそう言い放つと、青く冷たい魔力がジンの体内に直接注がれた。

その瞬間、ジンは目玉を見開き、耐えきれず絶叫した。

大きなリスクを伴うこの外法、少し甘く見ていたかもしれない。

考えてみてほしい。今ジンは味わっている苦痛を例えるのなら、口の中に腕を直接ねじ込まれ、食道を通して拳が胃の中までたどり着き、胃の内壁を鷲掴みにしてそのまま内臓を一気に口の中

から引きずり出されるような・・・凄まじい苦痛と激痛、そして耐えようのない激しい嘔吐。一度ドクターの魔力が体内からすべて排出された途端、ジンは体を弓なりに持ち上げながら悲鳴を上げ、耐えきれなくなり口から血と胃液を盛大に吐き出した。

「ウゲエ・・・・・・・・ゲエ、ウゲエ・・・・・・・・」

「まだまだこれからが本番だよメガネ君、今度はこれを何度も繰り返すんだからね。諸君もしっかり彼を押さえていたまえ」

「ゲロかかったさ～！（泣）」

ドクターはそのままジンの意思を無視し続けながら、何度も何度もジンの体に魔力を注ぎ込み続けた。その地獄の拷問のような光景に恐れをなしたアゲートは、これなら確かに精神がイカれて死んでしまうのも無理がないと悟った。顔や腕に飛び散ったジンの胃液を拭うこともできないまま外法作業は続けられ、その度にジンは悲鳴と胃酸を吐き続けた。

コルトとグスタフの戦いは、意外にもコルトが優勢を保ちながら続けられていた。

コルトの使う武器は銃、しかも1丁や2丁などではない。拳銃を2丁に加え、シースナイフ一本にライフル、ショットガン、グレネードランチャー、そしてまさかのミニガンを一門所持している。拳銃以外はすべてあのゴルフバックの中に収納されており、必要に応じて使い分け、グスタフを翻弄している。

更に驚かされるのはコルトの使用する弾丸の正体。コルトはこの時一切の炸薬も鉛玉も使用せずに弾丸を発射している。その弾丸の正体は驚くなかれ「魔力」。しかもその魔力の波長は顔と大らか性格に似合わず「雷」の属性を持つ魔力だった。

コルトは手にしている銃の空っぽのマガジンの中に直接魔力を注ぎ込み、それを弾丸として発射していたのだった。

威力もさることながら、最も驚異的なのは弾丸のスピードである。普通の弾丸の速度がおおよそ秒速340mに対し、雷と同等の速さで発射されるコルトの弾丸は秒速200km。それはもう目で追うことはおろか避けることも受け止めることも不可能な速度なのだ。

そしてその速さはグスタフの能力をもってしても、吸収することができないという利点も生まれた。あまりにも早すぎて、体内で雷の魔力を吸収するより早く体外へ貫通してしまうからである。

その結果、コルトはグスタフの放つ氷と炎にさえ気を突けてさえいれば、離れた場所から目標を正確にハチの巣にしてやることのできるのだった。

華奢な体からは想像できなかった意外な脚力で空中を飛び回り、2丁の拳銃でグスタフの急所を狙い撃つと、着地と同時に迫ってくるグスタフをショットガンで撥ね退け、高圧縮した魔力を封入したモスカートをセットしたグレネードランチャーを発射、着弾と同時に周囲一帯を固形化した雷が襲いグスタフの体を貫く。トドメはとっておきのミニガンを取り出し、持てる魔力をフルに使って一斉掃射。一撃一撃の効果は小さいが、数を束ねれば化け物すらも寄せ付けることの無い無敵のガトリングでグスタフの体をバラバラにしつくして見せた。

「グウ！！クソッ、あの小僧なかなかやってくれる」

（とにかくこの距離さえ保ち続けていれば反撃される心配はない、集中！）

「小僧・・・神の力を舐めるなあああああ！！！」

心機一転、これまで接近戦を好んできたグスタフが予定を変更して雄叫びを上げた。同時に顎が外れてしまいそうなくらい大きく開いた口の中から一つの巨大な氷柱がミサイルのように発射された。実際にその氷柱はミサイルとまったく同じように末端部分からジェット噴射のように炎を吹き出しコルトへ向かって真っすぐに突進してきたのだった。

氷と炎の合成魔術、ドクターがカクテル・マジックと称したばかりの新たな魔術をグスタフが再現して見せた。

更に氷柱のミサイルはコルトに衝突するよりも早く空中で突如バラバラに分解し、巨大な弾道ミサイルが細かいマイクをミサイルへ姿を変貌させコルトを360度全方向から襲いかかってきた

。

だが、コルトの身体能力は予想の斜め上をゆく凄まじい技を披露してくれる。

あろうことかコルトは両手に拳銃を持ち変えると、迫りくる氷柱のマイクロミサイルを一発ずつ正確に撃ち落とし始めたのだった。ミサイル一発の迫る速さは時速180km強、弾数はざっと200発。弾切れの概念がない銃だからこそ可能な無限射撃とコルトの精密な射撃テクニック、そして虎眼も目を疑ってしまうような強靱な視力と反射神経。全てを打ち落とすのではなく、避けられる弾を避けながら邪魔になる氷柱のみを打ち落とすその技術は、神業と呼ぶのに近かった。

しかしそこはコルトも神ではなく人間の子、100%全ての攻撃をよけきるには至らず、一発の氷柱がコルトの被っているニット帽に突き刺さりそのまま頭から引きずりおろされてしまった。帽子を外されたコルトの頭髪は以外にも天然パーマ気味で、髪の毛が外に晒されたことで全体がボサボサと盛り上がってしまった。

しかしそれはどうでもいい、コルトにとってこの帽子が外されてしまったという事実の方はよっぽど危険だった。ちょっとだけ秘密があったのだ。

帽子の内側に隠され続けていたその秘密を目撃したグスタフは、思わず腹の底から笑いが込み上がりゲラゲラと笑い飛ばした。

「ハッハッハッハッハッハッハ！！なんだ貴様は、なんだその頭は！？滑稽だな、貴様男のくせにそんな趣味があったとは、ハッハッハッハッハッハッハッハ！！」

「ちょっ！！見るな、見ないでください！！」

コルトは戸惑いを隠せず、一瞬自分の帽子がどこへ消えてしまったか探すためにグスタフから目を背けた。

それがグスタフにとって最大のチャンス、爆発的に発達した脚力でコルトとの間の距離を一気父締めると、炎を纏った拳でコルトの腹を見事に貫いた。夕子が悪かったのは、ここであえて拳を振り抜かず衝撃をコルトの体内にとどめたまま遠く彼方まで吹き飛ばさなかったこと。熱と岩で殴られたような痛みで呼吸が止まってしまったコルトの体に、今度は今までのお返しと言わんばかりに無数の拳を叩き込んだ。顔を殴り、腹を殴り、顎を打ち貫き、胸を貫き、何度御何度も同じような場所を繰り返し繰り返し弄り続け、最後はひとつに組んだ拳でハンマーを振り下ろすかのようにコルトの脳天へたたき落とす。衝撃で砂の上を強くバウンドしたコルトはようやく遠くまで吹き飛ばされた・・・はいいが、たった数秒の間でボロ雑巾にされてしまうのだった。最後の意地で拾った帽子をかぶり直すと、うつ伏せで倒れていた背中にグスタフの片足が強くのしかかってきた。背骨が軋み、思わず小さく悲鳴を上げてしまう。

「貴様はこの私にとって少々厄介な存在だった。今こうして捕まえることができたことに私は非常に安心している」

「痛い・・・離してくれますか、重いんですけど？」

「重いか・・・ならもっと重くしてやろう」

言うやグスタフは足首をひねり、踵を中心に体重を強くかけた。ドリルの先端が背中に食い込むかのような鋭い痛みには耐えられないコルトは鯁のように身をのけぞらせ、声にできない苦痛の悲鳴を上げた。

「クククク・・・苦しめ苦しめ。貴様の死が、私に明るい未来を授けてくれる！」

蟻を踏みつぶすことに躊躇いを感じない無邪気な子供のように、グスタフはもう一段足の裏に力をもめてコルトの背中を踏み抜いた。

いつまで持つか・・・コルトが壊れてしまうのが先か、ジン達が回復して助けに来てくれるのが先か。それまで耐えなければならない、コルトはそう自分に言い聞かせ激痛に耐えるのだった。

一方、最後の可能性に賭けて肉体から無理矢理魔力を引き出そうとしているジンは・・・ここで限界を迎えようとしていた。

全身が激しく痙攣をおこし、白目を剥いて意識を失っている。胃の内容物のみならず、胃液も一滴残らず吐き出した体の中はもう何も残っていない。それでもまだジンの体からは魔力が発動できていない。このままでは確実にジンは死んでしまう。せいぜいあと一回だけ、ドクターに残された魔力もジンの体力もあと一回が限界で間違いなさそうだ。

「なあドクター、本当に大丈夫さ？ジンこのまま死んだりなんかしないさ？」

「狼狽えるなバンダナ君、言っただろ、この外法は元から命にかかわる危険な方法だと。メガネ君はそれを承知の上で臨んでいるのだから君はメガネ君を信じてやりなさい」

「とは言ってもよう、いくらなんでもこの顔はもうヤバいぞ？」

「うむ・・・生きている人がしてはいけない顔になっているな」

「アヘッ☆・・・なんちゃテ」

「うるさいうるさい！どっちにしろこれが最後だ、最後の可能性、キミに全てをくれてやるから覚悟するんだね、メガネ君！！」

体内に残されている最後の魔力をジンの体に注ぎ込んだ。

もう声も挙げられなくなったジンは再び全身を激しくのけぞらせ、最後の苦痛をじっくりと堪能させられるのだった。

ドクン……

ドクン……

ドクン……

ドクン……

ドクン……

ジンの体内で、今まで感じたことの無い未知の鼓動が躍動し始めた。

ジンは目を覚ますと、自分は何もない真っ暗な世界に一人だけポツンと突っ立っていた。欠如しているはずだった体のパーツも、全身に負っていた傷も何もなかった。

ここは自分の意識の中、実際にその世界にいるのではなく自分の中にある精神のイメージの中に立たされているのを自然と理解する。

自分の精神の中がこうも真っ黒いものだったとは、自覚していたがこうはっきり見せられるとかえって面白くなってしまう。

ドクン……

また同じ鼓動が響いた。自分の背後からその音は聞こえてきた。ジンはその場でクルッと振り返ると、正面に光が見えた。

ランプの光でも太陽の光でもない、ましてや焚火でもタバコの火でもない。

その光はまるで人魂のように空中をフワフワと浮かび、何かを探しているかのようにウロウロと漂っている。

ドクン……

この鼓動の発信源はあの人魂で間違いなかった。ひとたび鼓動が響くたびに人魂は自らの質量を増し、淡く輝く白い光がやがて緑色に染まり始めてゆくのがあった。

これを見たジンは、全てを理解できた。説明など何もいない……自分の体の中にあるソレは、間違いなくジンの求めていた力そのものだったのだから。

光はまだ目的地を求めてウロウロと浮遊し続けている。見ていられなくなったジンがその場で大きく両腕を広げると、光はジンの存在を確認し、まっすぐに……ゆっくりと近づいてきた。

良いぞ……そうだ、そのまま来い。

オレはここだ。

そのまま大人しくこっちへ来い。

そうだ、来い・・・来いよ。

オレは・・・オレは・・・

オレは・・・ここにいる！！

続

古 虎眼

出身 ドルゴ大陸、スペツナズ村

前職 無し（15歳で旅を始める）

親族 父、母、弟二人

身体的特徴 髪／黒、長髪、両サイドの髪を長く伸ばしている

後ろ髪は頭の高い位置で一本に縛ったちょんまげ頭

前髪は長めに流す

服／黒い闘衣（チャイナスーツ）、ランニングシャツ

長い腰布、カンフーシューズ（自作の仕込み靴）

爪先から踵まで重い金属板を仕込んだ自称トレーニングシューズ（片靴5kg）

アクセサリ／シルバーバングル（トライバル模様）

戦闘力 何とも不死身で無敵で不敗で最強で馬鹿馬鹿しい

戦車を余裕で持ち上げる腕力、1cmの鉄板を貫く拳、砲丸を破壊する脚力

キャラクターイメージ 斬鬼さん、アーカード

古 猫眼

出身 同上

前職 同上

身体的特徴 髪／黒、長髪、独自の編み込み頭

後ろ髪を上下半分に分ける→

下半分を三つ編み→上半分の髪を三つ編みで縛る

前髪はヘアピンで左の73分け

服／同上

アクセサリ／同上

キャラクターイメージ 超鈴音